北大静内研究牧場での北海道和種馬仔ウマの離乳に伴う行動変化

持田　宏夢

【背景・目的】牧場では家畜の飼育管理という目的から、仔ウマが母ウマから独立して暮らすのに十分成長した段階で人為的に仔ウマと母ウマを分ける「離乳」が実施される。半野生下のウマを対象とした母子関係に関する先行研究はあるものの、牧場での「離乳」に焦点を当てたウマの行動研究は乏しい。したがって本研究では牧場での「離乳」に伴う仔ウマの行動や社会関係の変化を明らかにすることを目指した。
【方法】本研究は国立大学法人北海道大学北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション静内研究牧場で飼育されている北海道和種馬の 0 歳齢仔ウマ 22 頭を観察対象とした。個体追跡法を用いて 1 頭の仔ウマを 20 分間連続して観察することを 22 頭でランダムに繰り返し、仔ウマが行う採食や休息、他個体との社会交渉を記録した。同牧場では仔ウマが生後 5-6 ヵ月齢となった 10 月に「離乳」が実施された。この「離乳」以降、母ウマと別の群れで暮らし始めたグループ（12 頭、「10 月離乳組」と表記）と、10 月の段階では「離乳」の対象とならず母ウマと同じ群れで暮らし続けたグループ（10 頭、「11 月離乳組」と表記）に仔ウマが分けられた。観察は次の 3 場面で行った。①10 月の「離乳」が行われる前の期間に、すべての仔ウマが母ウマやおとなメスと同じ群れで暮らしていた場面（群れ内頭数 51 頭、110 時間観察）。②10 月の「離乳」に伴い 10 月離乳組の仔ウマが群れからいなくなったが、11 月離乳組の仔ウマが引き続き母ウマやおとなメスと同じ群れで暮らしている場面（群れ内頭数 39 頭、53 時間 20 分観察）。③10 月離乳組の仔ウマが「離乳」以降、仔ウマのみの群れで暮らし始めた場面（群れ内頭数 10 頭、30 時間観察）。
【結果・考察】10 月に行われた「離乳」前後の場面で、10 月離乳組と 11 月離乳組の間に共通する行動傾向が 3 つあった。①10 月の「離乳」に伴い群れ内にいる同年代の仔ウマの頭数が半減した後も仔ウマ同士の近接率が低下しなかった。②「離乳」後の場面で仔ウマ同士の近接関係および親和関係が再構築されやすかった。③「離乳」後の場面で仔ウマ同士の敵対的交渉が増えた。「離乳」に伴って群れ内にいる同年代の仔ウマの頭数が半減したことで、仔ウマは他の仔ウマとの近接関係を維持するためにそれまで関係が希薄だった仔ウマとも近接するようになった。そこで仔ウマ同士の近接・親和関係に再構築が生じ、その過程で仔ウマ同士の敵対的交渉が多くなったと考えられる。

10 月離乳組と 11 月離乳組の仔ウマが 10 月になされた「離乳」前後の場面で見せた行動のうち、両者の間で 2 つの相違点が確認できた。①「離乳」前後の場面での採食と休息の生起率に、11 月離乳組の仔ウマでは有意な変化がなかったが、10 月離乳組では「離乳」後の場面で採食の生起率が有意に高くなり休息の生起率が有意に低下した。10 月離乳組の仔ウマは、母ウマを含めたおとなメスと近接している場面の方が、それらのウマと近接していない場面に比べて有意に頻繁に休息する傾向があった。この事実から、「離乳」に伴うストレスによって 10 月離乳組の仔ウマの休息頻度が低下したという解釈の他に、群れ内に成馬がいるか否かが仔ウマの休息に影響を与えていた可能性も示唆された。②11 月離乳組の仔ウマ同士のペアの中には「離乳」前後の場面で強固な近接・親和関係を維持した例があったが、10 月離乳組同士のペアではそのような例がなかった。つまり 10 月離乳組の仔ウマ同士のペアでは、「離乳」前に強固な近接・親和関係を築いても「離乳」後の場面にかけて維持されなかった。ニホンザルに関する先行研究では母ザル同士が頻繁に近接していることでその子ザル同士も近接することが知られており、同様のことがウマにも当てはまる可能性がある。すなわち「離乳」後の場面では母ウマが群れからいなくなったことで仔ウマ同士の強固な近接・親和関係が希薄になった可能性があり、母ウマとの別れが仔ウマ同士の近接関係や親和関係といった社会関係に変化をもたらしたのかもしれない。（比較行動学）